

全選考委員絶賛!

斎藤美奈子氏 藤沢周氏 保坂和志氏 町田康氏

第54回

文藝賞受賞作

早くも話題沸騰!
絶賛の声続々!

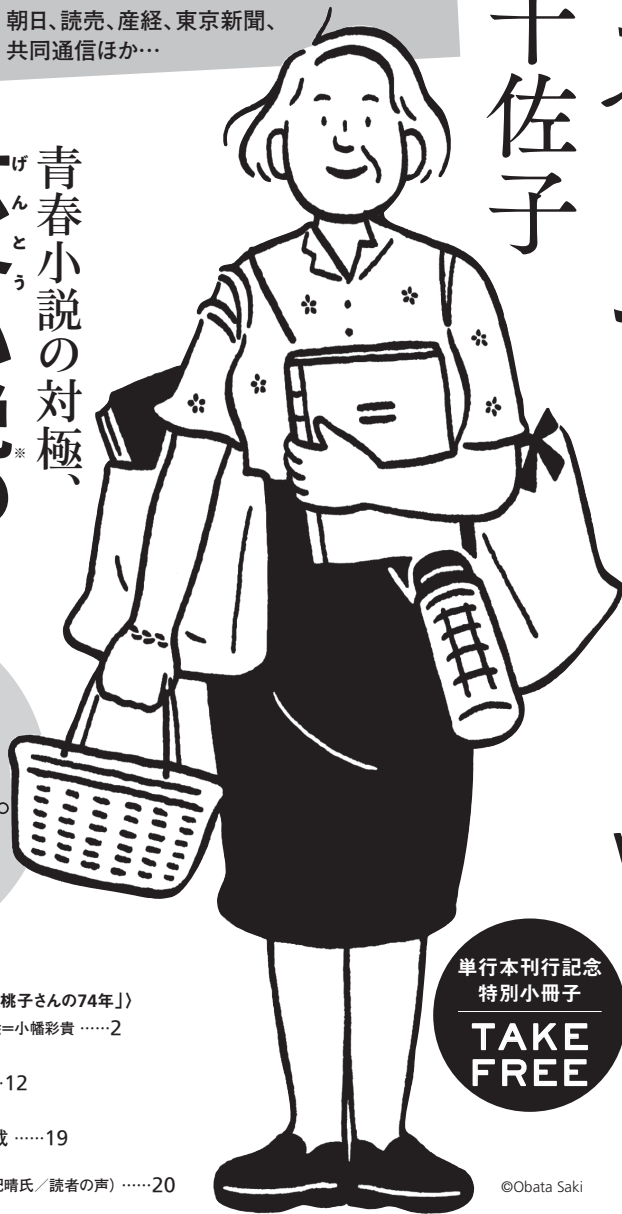
上野千鶴子氏、小林紀晴氏、

朝日、読売、産経、東京新聞、
共同通信ほか…

おらおらでひとりいぐも
若竹千佐子

青春小説の対極、
げんとう
玄冬小説の
誕生!
63歳、史上最年長受賞
渾身のデビュー作!
※玄冬小説……歳をとるのも悪くないと思える小説のこと。

74歳、
ひとり暮らしの桃子さん。
おらの今は、
こわいものなし。
夫に死なれ、子どもとは疎遠。
新たな「老いの境地」を
描いた感動作!



単行本刊行記念
特別小冊子

**TAKE
FREE**

©Obata Saki

〈特別企画「絵と文でよむ、主人公・桃子さんの74年」〉

「桃子さん」文＝若竹千佐子／絵＝小幡彩貴 ……2

〈一部試し読み〉

『おらおらでひとりいぐも』……12

〈特別掲載〉

文藝賞受賞スピーチ全文掲載 ……19

絶賛コメント

(選考委員／上野千鶴子氏／小林紀晴氏／読者の声) ……20

『おらおらでひとりいぐも』刊行記念
絵と文でよむ、主人公・桃子さんの74年

桃子さん

文 〓 若竹千佐子（本文より抜粋）
絵 〓 小幡彩貴

桃子さんは周造^{しゅうぞう}の突然の死を
心のどこかで

いまだに受け入れられないでいる。





その年の秋、組合長さんの息子との縁談が持ち上がり、好きでも嫌いでもなかったけれど桃子さんは受け入れた。とんとん拍子に話が進み、結納も済み、あと三日でご祝儀という日にあれが鳴ったのだ。ファンファーレ、東京オリンピックのファンファーレ。あの高鳴る音に押し出されるように、式場も段取りも何もかも整っていたのに故郷の町を飛び出してしまった。何にも考えていなかった。ただあの音が桃子さんに夢を見させた。

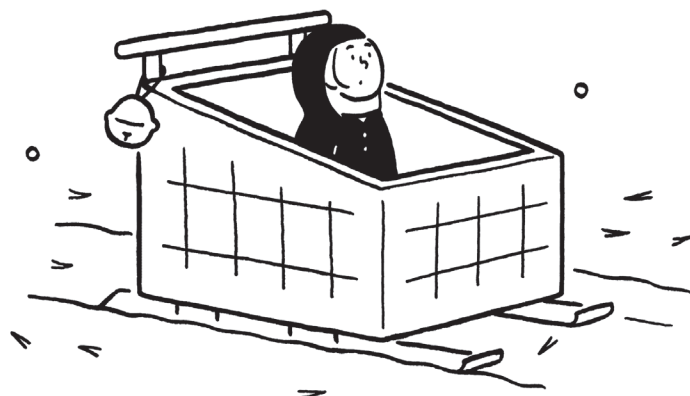
東京オリンピックの
ファンファーレに
押し出されるように
家を飛び出し、
上京した24歳の桃子さん。

桃子さんは思い出す、
生まれ育った
東北の故郷のことを。

そこは涙の出るほどなつかしい父がいて母がいて祖父母兄、嫁ぐ前の叔母たちの住むにぎやかな故郷の家だった。桃子さんは気がせいて震える手で引き戸に手をかける。戸を開ければ、ばっちやの割烹着に顔を埋めたときと同じ匂いがした。この匂いこそ故郷の家そのものなのだ。

いろんなものが垣間見える。大きな箱型の櫛そりに乗せられて診療所に通ったこと。櫛には大きな鈴が付いていて動けばシャンシャンなったこと。軟膏なんこうの匂い。ガーゼの上の油紙はその頃まだ家にあった番傘と同じ匂いだったこと。番傘は雨粒がぱらぱらんと鳴って大好きだった。

すべてなつかしくてあたたかい。



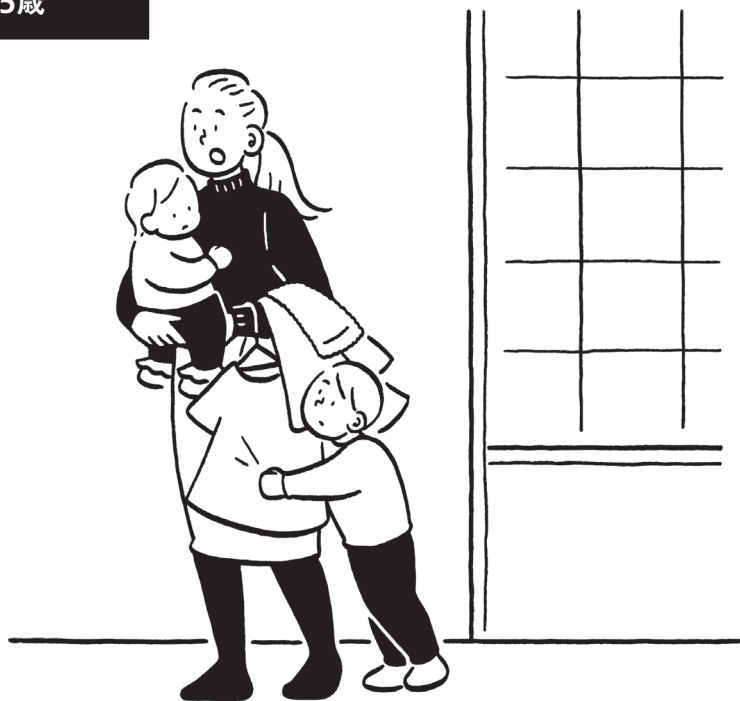
身ひとつでの東京生活を送る桃子さん。
アルバイト先で周造と出会い、
そして結婚――

昼飯時で店が一番忙しいとき、大きな声でおらは、おらはと話す声を耳にした。

後ろを振り返ると目を見はるような美しい男がいて、連れの男と話している。周りの好奇の目を意に介さないというか、そもそも気づいていないというか、屈託のない笑顔で大きな声で笑う。笑った時の白い歯が印象的だった。

それが桃子さんと周造の初めての出会いだった。どうやらその日から桃子さんは見違えるように元気になった。どの客にもにこやかに笑いかけ、機嫌よく仕事をこなした。

周造が来るたびに大盛りのライス、山盛りのサラダを出した。頼まれもしないのに何度もお茶をとしかえ、何度目かのときに周造は不思議そうな顔をして桃子さんを見上げた。



桃子さんの結婚生活は
おだやかでしあわせに推移した。
子供を産んだ、育てた。
子が独り立ちした。
満ち足りていた。あの日までは。

都市近郊の丘陵を切り開き、碁盤ごばんの目のようにきつちりと区画したひな壇に整然と立ち並ぶ同じような家並み、桃子さんの家は高からず低からずその中腹にある。家の前の思いのほか急坂を下ればかつてはスーパーがあった。若い頃の桃子さんは自転車の前と後ろに子供を乗せ坂を下りて買い物をし、ハンドルの両脇に買い物袋をぶら下げてまた一息に駆け上るといふ芸当もやってのけた。

あの頃の桃子さんは自分の老いを想像したことがあっただろうか。ましてや、独り老いるなどということを一度たりとも考えたことがあっただろうか。





亭主が亡くなってからというもの、
現実には以前ほどの意味を持たなくな
った。こうあるべき、こうせねば、
生きる上で桃子さんを支えていた規
範は案外どうでもいいもの思えて
きた。現実の常識だの約束事は亭主
がいて、守るべき世界があつてはじ
めて通用する。

15年の月日が流れ、
桃子さん74歳、
玄冬の時を迎える――

突然の不幸が桃子さんを襲う――

周造、逝^いつてしまった、おらを残して
周造、どごさ、逝^いつた、おらを残して

周造、これからだずどきに、なして

神も仏もあるもんでね、神も仏もあるもんでね

かえせじゃあ、もどせじゃあ

かえせもどせかえせもどせかえせもどせかえせもどせ

かえせもどせかえせもどせ神さまバカタレかえせもどせ

かえせもどせかえせ仏さまいるわけねじゃくそつたれ



子供も育て上げたし。亭主も見送ったし。もう桃子さんが世間から必要とされる役割はすべて終えた。きれいさっぱり用済みの人間であるのだ。亭主の死と同時に桃子さんはこの世界とのかかわりも断たれた気がして、もう自分は何の生産性もない、いてもいなくてもいい存在、であるならこちらからだって生きる上での規範がすっぽ抜けたっていい、桃子さんの考える桃子さんのしきたりでもいい。おらはおらに従う。

まだ戦える。おらはこれがらの人だ。こみあげる笑いはこみあげる意欲だ。まだ、終わっていない。桃子さんはそう思っ
てまた笑った。

74歳桃子さん、

おらの今は、こわいものなし。



おらおらで ひとりぐも

若竹千佐子

(単行本 69ページ〜79ページ)

診察を終え、会計を済ませたのは昼過ぎだった。病院を出たとたん、暑い日指しが桃子さんの頭上に容赦なく降り注いだ。陽炎が揺れている。さっきもらったばかりの薬を入れたポリ袋をぶらぶらさせながら、木陰伝いにバス停までの道を歩いた。

いつもの喫茶店はそれほど混んでいなくて窓際の席に着いた。

病院通いのあとはバスに乗って最寄りの駅まで行き、電車の待ち時間を利用して、駅前のロータリーが見渡せる喫茶店二階のこの席に座る。観葉植物に囲まれた柔らかなソファが心地よくて、かすかに流れる洋楽も好ましく、外出の締めくくりにここに寄って駅前の風景を見下ろすのが常だった。

頼んだソーダ水を待ちかねたように口に含んだ。ピリピリとした甘さが舌を刺激してのど元を通り

過ぎたとき、桃子さんは自分が思いの外疲れているのに気が付いた。暑い日差しにやられたのかもしれない、とろけるような睡魔に襲われて、グラスの底ではじける泡を覗き込んでいるつもりが何も見ていなかった。ストローを握ったままほんの数分眠っていたらしい。

気が付いたときここがどこか、なんのためにここにいるかもすぐには思い出せないほどだった。

だがソーダ水のせいなのか、数分の眠りのせいなのか、気分がとてもさわやかなのだった。透明な意識の中で桃子さんはある予兆にとらわれていた。自分がこれから思いもかけない気づきを得るのだなどという。何かは分らないけれどそれはすぐそばまで来ている。

この感覚は実は初めてではなかった。桃子さんは普段は理詰めでものを考えたいタイプの人間である。自分の経験を積み重ねてこれこれこうだという結論を得る。ところが突然、何かをすっ飛ばしてそういう思考の積み重ねをなくしてばいと気づきを得るときがある。

人はそれを直観と呼ぶのかもしれないが、桃子さんはその言葉で片付けたくないのだ。

桃子さんはそんな時いつも自分の内部に自分のあざかり知らない未知の自分がいて、そのものが桃子さんの知らないところでもずっと考え続けていて、あるときひよいと浮上して、何の説明もなしに正論だけを述べて、さっと消えていくという思いに駆られる。桃子さんはそれを非常に頼りにしていた。自分の内側から聴こえてくる様々な声、それこそがわが友、わがはらからと思っている節がある。自分のような人間、容易に人と打ち解けられず孤立した人間が、それでも何とか前を向いていられるのは、自分の心を友とする、心の発見があるからである。桃子さんはそう思っている。自分はひとりだけれどひとりではない、大勢の人間が自分の中に同居していて、さまざまに考えているのだという

夢想は桃子さんを気強くもさせた。あるときは、世間は仲間だのきずなだのを強調して、それがいない者はどこか欠陥があるように言う風潮があるが、大きなお世話、そんな人間こそ弱いのである、弱いから群れるのであると虚勢を張った。

喫茶店の二階で桃子さんが感じたのは、内部の誰かがすでに気づいているのだが、桃子さんの組上にはまだ載っていない何かがある、という漠とした予感なのだった。

おらあど何に気づけばいいのさ、桃子さんはそとと呟いてみる。

もどかしくて、何が分がればいいのさ、もう一度言ってみた。

あたりを見回し、それからソーダ水のはじける泡をじっと見つめた。その音に耳をそばだてた。グラスのそばに無造作に置かれたポリ袋からはみ出たいろんな色形の錠剤の入った薬包紙の束を取り出し、光に透かしてみたりもした。

そして目をつぶった。

グラスの中でどれほどの泡がとりどりに浮上して、はじけて消えて行っただろうか。

桃子さんの意に反して網膜に何の像も結ばなかった。何の声も聴こえてこない。そんなはずはないのだ。桃子さんはにわかに慌てる。動悸を押し殺し、心を平静に保って訪れを懇願する。なのにやはり、心に何一つ結実しない。期待していたものが期待通りに現れない、ささやいてもくれない、桃子さんは打ちひしがれる。桃子さんの外部には何の変化もないが、その内側ではけなしの自信が音を立ててしぼんでいく。何しろ頼りにするのは自分だけ、その自分に裏切られるような。

周造。

桃子さんはこの日初めて亭主の名を呼んだ。

おら、今こんなところにいるよ。

気弱になった桃子さんは、自分の位置を確認せずにおれない。桃子さんを定位するのは、今はどこにいるのか分からないが、必ずどこかにいるはずの亡夫を定点と見定めた自分の在り所だけ。自分を取り巻く現実はいくらにも殺風景で希薄で、自分はこの世界でほんとに生きているのだろうか、比べて遠く隔てられた過去は色鮮やかに蘇る。桃子さんとして過去は恣意的なもの、美しい装飾が施されたものとうすうすは気づいている。それでもそこにしか自分の居場所がないように思われる。

周造。もう一度亭主の名を呼んだ。

次第に古い懐かしい思い出が桃子さんの周りを取り囲んで離さない。

ファンファールに押し出されるようにして上京したとき。桃子さんの回想は必ずそこから出発する。あのを境に確かに桃子さんを取り巻く風景は一変した。山の子から都会生活へ、良い悪いは考えない。とにかくそうだったのだ。

上野駅に降り立ったときのあの心細さ、それでいながら何とも言えない解放感を桃子さんは今に忘れない。たいへんなことを仕出かしてしまったという思いはあった。が不思議と後悔はなかった。もう引き返すことなどできないのだ、ならば後悔なんかしない、と自分に言い聞かせて。でもすぐにそんなことも不要になった。目新しさ、何もかも新鮮で心を奪われて、それに後悔だのなんだの後ろ向きのことを考える前に、まずここで働いて食べていかなければならないのだ。仕事を探した。何でも

よかった、住み込みという条件さえクリアできれば。すぐに蕎麦屋の店員募集の張り紙を見つけた。東京オリンピックの好景気に沸くこの街で贅沢さえ言わなければ何とかなりそうな気もした。あの頃は若かったのだ、疲れというものを知らなかった。夢中で働いた。店の雰囲気にもすぐになれたし、重い岡持ちを持って配達するのも苦ではなかった。店の近隣の道もすぐに覚えられたし、心配していた言葉にもすぐに馴染めた。生まれた時からこの街にいたようにだって装えばできそうな気もした。今は狭いこの部屋だけど、ゆくゆくはアパートを借りて一つ一つものを揃えて、そう思うだけで楽しかった。実際、あの頃はお菓子の入ったきれいな缶から、一つ手に入っただけで、それだけで部屋が明るくなった気がしてうれしかったものだ。

豊かになることがそのままさらさらした目標だった。

あの頃、痛く突き刺さった言葉がある。

蕎麦屋をやめてすでに何軒か店を替えていた。大衆割烹の店で朋輩の子のひとこと、桃ちゃんてさ、わたしっていう前に、必ずひとき入れるんだよね。山形から出てきたトキちゃんという子だった。目がくるくるよく動く子でその子がいたずらっぽい目つきでそういった。背中に冷や水をかけられた気がした。

確かにそうだった。子供のころからずっと、わたしという言葉への憧れと反感、いや、むしろおらという言葉にたいする蔑みと愛着、それらが入り混じって、わたしというとき一瞬混乱して滞る。分かっていたのだ。でも人に気づかれていたとは知らなかった。

いったい、いまさら自分は何に拘っているのだろう。飛び出してきた父や母や親戚の人がたへの済

まなさであるのか、それもあるかもしれないが、そんなことはもうたいがい拭拭したはずだ。親は親子は子だ。親の足元を離れ独りで生きるのもそれはそれで潔い生き方でないか。だいたい中学を出たばかりのどれほどの人が集団就職で都会に出て来たか。少し遅れただけで自分もその中のひとり、少しも恥じることでないはずだ。

それでもトキちゃんの言葉は後々まで響いた。次第に口数が少なくなった。不思議なことに口数が減ると、豊かさへのあこがれも減じていった。飾りたてるといふ喜びが失せてきた。どんなに頑張ってみたところで所詮豊かさの辺縁にいるのだ、という思いもあった。

いつまでたっても追いつけない。桃子さんの夢だったものは次第に遠くにかすんで色褪せていった。その頃だったろうか。あの夢を見たのは。

八角山の夢。

八角山は桃子さんの郷里のぐるりを取り巻く山の中で一番高い山である。

ばっちは朝晩手を合わせていた。信仰の山でもあった。

だが、鍋を逆さに伏せたようになってっぺんが丸こくて凡庸な何とも冴えない山なのである。

桃子さんはこの山が嫌いだった。桃子さんの小中学校には毎年写生大会というのがあって、その日は丸一日思い思いに好きな場所に行つて絵を描いて過ごす。桃子さんも画板と絵の具を持って張り切つて出かけるのだが、周りを見渡しても何も描きたいものはないから、結局刈り取った稲を乾かすための延々と続く稲ばせと、その向こうの丸こい八角山を描くのが常だった。どこを見渡しても木と山と田んぼと、点在する家々のほかに何もない、つくづくつまらない場所だと思った。その象徴があ

文藝賞贈呈式 若竹千佐子受賞スピーチ全文

文藝賞選考委員の皆さま、選考に関わってくださったすべての皆さま、またここにおいでの大勢の皆さま、皆さまを前にして私は夢でも見ているのではと、私はこんなに幸せでいいんだろうかと、足がすくんでおります。

もう一生私の小説が目の見ることなどないんだろうな、と思っていました。それでもうここまで来たんだから最期まで小説を書いていこうと、書いて私の自己完成を目指そうとそれで悔いなしと思っていたところで、文藝賞の最終選考に残ったというお電話をいただきました。それからの私をご想像ください。もうほんとうにほんとうに幸せでした。

私は自分でも不思議ですが、何の根拠があるわけでもないのに、私は小説を書くのだと、書くべき人なのだと子供のころから思っていました。地元の教育学部に進みましたから、そのころ、人格の陶冶だの自己変革だのという言葉が普通に飛び交っていて、私も人が変わっていく姿を書こうと思ったのですが、ところが、どうやったら人が変わるのか全く分からない。何をどう書けばいいのか全く見当がつかなかったのです。

と言って苦心惨憺歯噛みして生きていたわけではありません。小説の二文字は常に頭にありましたが、私はその時々を元気に楽しく生活に没頭しておりました。

長く生きてみて人生いいことばかりじゃなかったという実感はあります。でも、振り返って自分の生き方に一つの一貫性を見つけたとき、私はやっと私の小説のテーマが見つかったような気がするのです。

63歳、遅い出発のようですが、私にはきつと必要な時間でした。

小説の神様がいるなら、私の小説の神様は何と気長に粘り強く待っていてくださったと思わずにはおれません。

63歳にしてやっていただいたプロの小説家としてのチャンスですが、焦らず、私が生きてきた中での実感を手ごたえのある言葉で語っていきたいと思っています。

私の小説の師である根本先生は、小説を書き終えてもたまには小説の主人公に会いに行きなさいと言われます。

私も桃子さんだけでなく、やあやあ遊びに行ける場所を増やしたい。

これからどんな主人公が表れるか、まだ見当もつかないけれど、まだ見ぬ主人公たちと心の中で共同体を作るというのはほんとうにワクワクする仕事です。

と同時に、今私がどんな社会で生きているのかという問いを疎かにしてはいけないと思っています。社会に向ける目線と心の探求とをふたつながら大切にしつつ小説を怠けず書いていこうと思っています。そのことをお誓いして今日の謝辞とさせていただきます。

本日はほんとうにありがとうございました。

若竹千佐子

2017年10月23日
於・山の上ホテル



©小林紀晴

若竹千佐子(わかたけ・ちさこ)

1954年、岩手県遠野市生まれ。岩手大学教育学部卒業。現在、主婦。
55歳から小説講座に通いはじめ、8年の時を経て本作を執筆。
2017年、第54回文藝賞を史上最年長となる63歳で受賞。

の八角山なのだ。そう思っていた。

その山の夢をトキちゃんと共に暑苦しい四畳半で見たのだった。

山のとっぺんが間近に見えた。

どうやら桃子さんは山の麓の古い木造校舎の廊下のようなところにいるらしい。

木枠で囲まれたガラス窓が何段にも重なっている。小さな窓に分割された山がひととき大きく全面に広がっていた。桃子さんは窓ガラスの一つに食い入るようにして山を見上げている。

夜、だった。

月明かりに照らされた山が壁のように眼の前にあった。山は雪に覆われていて、とっぺんの木々の梢に降り積もった雪までがはつきりと見て取れた。神々しくしんと静まり返って人を寄せ付けない、震え上がるような威圧感があつた。

美しい、凍える、山。

息を吞んで、桃子さんはあの山に登りたい、登れるだろうか、と黙っていても登ったら帰れないと何故だか知っている。

胸の底まで冷気が籠って息がつけなかった。桃子さんの孤独と山の計り知れない孤独とが向き合っていて、ちっぽけな自分が如実であつた。対して山の圧倒的な大きさと威厳とを見せつけられて、桃子さんはしょぼくしてすがって泣きたかった。

はじめその山が八角山だと分からなかった。だがすぐにあれは八角山だ、八角山以外に考えられないと夢の中で思っていた。

(……つづきは単行本で)

文藝賞全選考委員絶賛！

東京五輪の年に上京し、二人の子どもを産み育て、主婦として家族のために生き、夫を送って「おひとりさまの老後」を迎えた桃子さんは、戦後の日本女性を凝縮した存在だ。桃子さんは私のことだ、私の母のことだ、明日の私の姿だ、と感じる人が大勢いるはず。——**斎藤美奈子氏**

宮沢賢治「永訣の朝」にある「Ora Orade Shitori egumo」のフレーズ。それを悲しみのうちに死ぬの意ではなく、独り生きていく「自由」と「意欲」に結びつけた。「老い」をエネルギーとして生きるための、新しい文学が生ま出された。——**藤沢周氏**

人の気持ちは一色ではないということを、若竹さんはよく掴んだ。年を経たからこそ、若々しい小説。——**保坂和志氏**

取り返しのつかない命のなかで、個人の自由や自立と、その反対側にある重くて辛いものも含めた両方を受け取って、人生を肯定的にとらえるまでにいたったのが見事。——**町田康氏**

早くも話題沸騰！ 絶賛の声続々！

ほんとね、ほんとに「独りがいい」。出会いも欲びだが、死別も解放だ。地声で語られた女のホンネが炸裂！——**上野千鶴子氏**

死すことのない共同体の言葉。それが支える「老い」の姿に初めて触れた。「頭の中に大勢の人たちがいる」ことは、きっと孤独ではない。——**小林紀晴氏**

読者の声

色んなひとりがあって、ひとりはひとりであっていい。生きるべし。人生にちょっとした援軍が来た感じがして、うれしいです。(50代女性)

あれほど嫌った涙をぬぐいもせずただ泣きに泣いた。(中略)まさに終活をと思う高齢者の「課題図書」なのである。じたばたとするよりのんびりと読むこの1冊に「答え」がひそんでいるのだ。(70代男性)

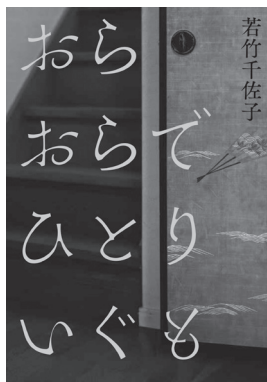
どれほどたくさんの女たちがこれは私の物語だ、桃子さんは私だと思ってこの本を読むことだろう。生きることは苦しく辛い。しかし私の中にも周りにも大勢の桃子さんがいて戦っている。良い夫を得てかわいい子供に恵まれ憤ましく幸せに暮らしている女はこの本を読み。母となったすべての女はこの本を読み。一人で生きて一人で死んでいく女はこの本を読み。そして最後まで生き抜こう。(60代女性)

度々襲ってくる悲しみや寂しさの中でも思考し、気づき、夢想し、発見し、興味津々な桃子さんが愛おしい。(50代女性)

リズム感あふれる文体で新しい「老いの境地」を描いた、
第54回文藝賞受賞作。

『おらおらでひとりいぐも』 若竹千佐子

●1200円+税 ISBN 978-4-309-02637-4



河出書房新社 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2 <http://www.kawade.co.jp/>